



人類の未来を作れ。

GCL プログラム責任者、坂井修一教授インタビュー

GCL 用語・今学期授業紹介

GDWS 報告会

R2P/IST 知識創生シンポジウム開催報告



人類の未来を作れ。

坂井修一情報理工学系研究科長 インタビュー
(GCL プログラム責任者)

従来の博士課程には、基礎研究の研究者を育てるというミッションがありました。しかし、激しく動く世の中において、大学の、そして専門性を有する人材の役割は、社会的にイノベーションを起こすことにも重点が置かれるようになってきました。すべての博士が実社会で創造的な仕事をできるわけではありませんので、そうした人材を育てる教育というのは一見して奇妙なものでしょう。しかし、まだ自身の潜在力に気付いていない人を目覚めさせ、気付きを与える「目覚まし時計」の役割、そして目覚めた人達の能力を十分に発揮できるように道筋をつける役割がGCLプログラムにはあります。

GCLで学ぶ「先端ICT」は、世界の牽引力であり、産業的という以上に社会変革的なものです。ICTは人と人との関わり方、社会の在り方を変えました。GCLの学生には、20年、30年先を見て、さらにICTによって社会をどのように変革するかを考えてほしいのです。特に文科系の学生には、情報を道具として使うだけでなく、それによって社会をどうしたいかを考えることを期待します。文科系から理科系に、どんなものを作りたいのか提案することもできるでしょうし、逆に理科系から文化系に、どう社会を変えられるのか提案することもできるでしょう。分野間の垣根を取り払うことで、コロンブスの卵のようなものも見つけてほしいところです。

1期生は、これから2年次に上がり、さらに博士課程で世界を相手に武者修行することになります。いまある課題を解決するのも大事ですが、それ以上に、何もないところからクリエイティブに、世界を明るくするようなことをしてほしい。多様性の容認・社会の調和といった、人間としての総合的な能力を求めています。

4月から加わる2期生には、GCLという開かれた広場で能力を磨いてほしい。社会システム全体が変わっていく中で、どんな仕事をしたいか考えると良いでしょう。スティーブ・ジョブズやビル・ゲイツは確かに技術の面で大きな変化を起こしましたが、GCLのコース生にはそれ以上に、人類社会全体を幸福にするような変革を果たすという視点で大きなことをしてほしいと思っています。

従来のものに「プラス1」するだけでなく、0から出て100を作るような仕事をしてください。社会の価値観は変化しており、単純な進歩史観は崩壊してしまったかもしれませんが、だからこそ技術のみに留まらないスケール感のある仕事をするチャンスでもあるのです。君らがやらずに、誰がやる——そう思っています。

(聞き手：森友亮 撮影：柴山翔二郎)

知識創生シンポジウム



(上図) 会場の様子

(左図) パネルディスカッションの様子

シンポジウム参加報告

3/17(月)に福武ラーニングシアターにおいて、GCL主催の知識創生シンポジウムが開催されました。R2P/IST(情報理工/産学連携)シンポジウムと冠してGCL学生向けに開催されているシンポジウムの第7回目であり、GCL関係者や協力してもらっている経済産業省の方々が集まりました。

GCLプログラム責任者の坂井修一教授の開会の挨拶のあと、前半と後半に分かれて基調講演を行い、講演者の全6名にてパネルディスカッションを行いました。最後の質疑応答では参加者と講演者とが活発な議論をしました。

◆知識創生とは何か？

知識創生とは、分野ごとに蓄積されていく知識を体系建てて保持することによって、様々な知見を転用できるようにすることを意図しています。今後日本が先進国として様々な課題に取り組む上で、如何に知識を蓄積していくのが焦点となっています。

◆領域知識の創生(前半部分)

経済産業省、内閣官房などの有識者が集まり、知識創生についての基調講演をしました。

最初は経済産業省大臣官房審議官の西山圭太氏より講演がありました。現在の日本は先進国ですが、今後生じる課題として内需の減少が挙げられます。海外の市場で戦っていくためには、多様な顧客に対応する必要がありますが、今までの日本企業はマーケティングデータを

製品開発や宣伝に使わない傾向にあり、今後はマーケティングデータを使って消費者に近いものを生産し売り込まなくてはなりません。日本においては、少子高齢化が進む中で、その消費行動の傾向をデータとして取っていくことで、今後の世の中で必要になってくる情報を蓄積することができると話しました。

領域分野の知識の蓄積という点について、経済産業省兼内閣官房の平本健二氏が講演しました。近年では公共性の高い問題に対して、ハッカソン・アイデアソン等で問題解決を図る動きが日本国内でも活発ですが、マネタイズ等が難しいため、それを実現まで持っていくことが難しく、すぐには実現されません。そこで、知識やアイデアをプールしておく環境が求められているとの話がありました。

◆ビッグデータ時代の知識創生

國吉康夫教授から、GCLの趣旨に関する講演がありました。専門知を理解し、データを扱う事ができる、まさに現在産業界から求められている人材こそがGCLの輩出しようとしている人材であるとのことでした。

◆パネルディスカッションのまとめ

アメリカでは現在、データを集める人、解析する人、実用のために提案へとまとめる人などで役割分担をしています。日本では現在そういった動きが弱いですが、この例を始めとして、今後は様々な分野の人とコミュニケーションを取って新しいことに挑戦していく姿勢が重要であるとの意見もでした。

GDWS 報告会

積極的な議論が行われた
(写真提供・山内祐平准教授)



3月15日(土)13:00-17:00にグローバル・デザイン・ワークショップ(GDWS)第1回報告会が開催されました。GCLの中でワークショップの教育研究をおこなうGDWSの一年目の成果、今後の展開などについて、発表、ポスターセッション、パネルディスカッションが行われました。

GDWSでは、ワークショップを初級、中級、上級と三つのレベルに分け、それぞれ、ワークショップA、B、Cとしており、昨年度はワークショップA、Bが実施されました。

右に、報告会で説明のあったワークショップのうち、ワークショップAについて掲載します。

また、ポスターセッションにおいては、参加者が館内にセッティングした16枚の段ボールポスターを回り、主催者の説明を聞きながら、ポストイットを使ってコメントを残すという形式をとり、積極的な意見交換が行われました。

その後、下記の方々によるパネルディスカッションが行われ、GDWSの報告をふまえて、ひろくワークショップ・デザインのこれからについて議論がなされました。

登壇者(敬称略):

須永剛司(多摩美術大学)

会田大也(山口情報芸術センター)

牧野 司(東京海上日動火災保険)

安齋勇樹(東京大学 GCL)

司会: 苗村健(東京大学 GCL)

ワークショップ A「Urban × ICT」

Urban × ICTはオムニバス形式の講義で、月に1回か2回のペースで行われています。主に講師を招いて、レクチャーの後に学生たちが議論しフィードバックをするという形を取っています。特徴の一つは、グローバル化を意識し、海外の研究者や留学生を講師として招いたことです。GCL学生たちからは、「自ら興味を持って参加した」「ワークショップの時間が短く、議論が十分に行われていない」などのコメントがありました。

ワークショップ A

「What is Aging? 高齢者向けの新たな商品の検討」

このワークショップでは、某大手日用品メーカーの実際取り組んでいる課題に、GCLの学生もプログラムの一環として参加しました。テーマは、生活のなかのミクロなニーズの発見です。こうしたワークショップは企業が実際に取り組む課題なので、実践的な学習体験である一方で、企業側の都合があるため、教育プログラムとして運営する難しさもありました。

ワークショップ A「科学技術戦隊 WS」

このワークショップは「研究者技術者が自分の世界に閉じこもるのではなく、多領域の人々のコミュニケーションを取る」という主旨を持ち、4・5月に、毎回2日間、計3回開催されました。まず主催者から漠然としたミッション(課題)を参加者に与え、課題に関連するミニレクチャーが講師により行われます。その後、グループワークを経て、いろいろな道具を使い寸劇で発表し、課題を解決していきます。

■ 授業紹介

実践英語演習

グローバル化に対応する、ときいて多くの人が真っ先に思い浮かべるのは英語を自由自在に使える状態だろう。グローバル化＝英語ではもちろんないが、それでも英語を使えないよりはかは使えたほうが良いという考えはあながち間違いでもない。

大抵の学生はこれまで英語のインプットは行ってきているので、使える英語を習得するには、とにかくアウトプットが重要である。GCL実践英語はこのアウトプットを極限まで求められる授業である。土曜日に7時間！ぶっ通しで英語をしゃべる。毎週課題文を読んでプレゼンを作る。ネイティブの先生とのランチタイムも有意義だ。

あるとき授業の帰りに、忘れ物をして教室に戻ったとき、掃除のおばちゃんに「忘れ物なんかないよ」といわれ「Oh! Really?」と思わず呟いてしまったとき、この授業が身になっているのだと実感したものだ。

(執筆 経済経営 M2 岩尾俊兵)

技術利用と法 (佐藤智晶先生)

この講義では、技術利用のために情報がどのように使われるのか、製品やサービスが世に生み出されるまでにどのようなプロセスで、どのような法制度が機能しているのかを学び、イノベーションを生み出しやすいプロセスや法制度のあるべき姿を検討する。そのため、この授業はさまざまな法律分野を横断的に学ぶと同時に、イノベーションを創出するために「法」を道具として使うという思考も養う。

基本的に、法学の基礎が分からない学生でも理解できるように講義を進めるが、法学の基礎を理解している学生に対しては、研究や実務に有益なリーガルリサーチスキルも提供する。

この講義は基本的に、先生と学生との対話形式で進んでいく。イメージとしては、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の名物講義に近い。私達の身近な技術を例にして考えていくので、技術と法がどのように関係しているかが、初学者にとってもとても分かりやすかった。

(執筆 情報理工 M2 山元浩平)

情報システム論 (和泉憲明先生)

本授業は小～大規模情報システムの構築方法を理論と実践、両方のアプローチで学ぶ授業です。前半は教本と授業スライドをベースに講義形式で行われ、情報システム構築の基本的な流れと注意点、ケーススタディ、書類の見方／作成方法などを学びます。担当教員は大規模なシステム構築を数多く行ってきた経験を惜しみなくシェアしつつ、実際の現場で何が、どう行われているかを面白おかしく解説して下さいます。後半は複数のグループに分かれ、講義で学んだことを元にワークショップ形式で情報システム構築を実践します。各グループでアイデア出しから、それを実際に発注する段階までを行うのでシステム構築を能動的に学ぶことが出来ます(実際の構築は専門のスタッフが行います)。授業外でのミーティングや課題もあります。

(執筆 学際情報学府 M2 施井 泰平)

■ GCL 用語集

新 M1 の皆さま、ご入学おめでとうございます。GCL に興味を持ってくださった皆さんに、GCL のことをもっと良く知っていただくため、広報企画でまとめた GCL 関連用語を紹介します。

・インターンシップ

GCL コース生は原則として、修士課程の間に、海外を含む 6 ヶ月間のインターンシップ (国内 3 ヶ月海外 3 ヶ月が理想)を行うことが必須要件。インターンシップ先は世界中どこでも構わず、国際機関や NPO など選択肢にできる。

・Global Design Tech Talk Series (グローバルデザイン・テックトーク・シリーズ)

インキュベーション機構がおこなっている、企業・官公庁とのセミナー・シンポジウム。これらに参加することで企業のことを知ることができる。

・GDWS (グローバルデザインワークショップ)

苗村先生が GDWS 機構長

社会の本質的問題や新たな可能性を明らかにし、解決策や将来ビジョンを社会提言し、フィードバックを得る試みである。各回のテーマ設定のもと、社会の第一線の見識者を分野や産官民学の別や国境を越えて招待し、学生が主体的に参加し白熱討論を行う。専門家の指導のもと、企画、運営、テーマの事前調査と分析、国内外の見識者への参加交渉、提言の文書化と発信、社会の反応の調査にも学生が主体的に取り組み、社会実践力養成の場とする。

・広報企画

コース生以外の有志学生によって構成される組織。



GCL ニュースレター (本誌) の発行や、GCL 教員・社会人とのランチタイムなどのイベント運営を行い、GCL コース生をサポートする。

・GCL ラボ

工学部 3 号間 2 階にある、GCL 専用の共有スペース。コース生有志により企画が行われ、2014 年 2 月に完成した。グループワークを行ったり、イベントを開いたり、さまざまな用途に使用可能。

・TA (ティーチングアシスタント)

講師のサポートをするための授業準備や、その他 GCL に関する種々の業務を行う。

・プレゼンコンペティション

冬学期に、コース生 M1 を対象に行われる。それまでの活動内容や、今後の展望についてプレゼンを行う。

・プログラムコーディネータ

プログラムのとりまとめ役。GCL では國吉康夫教授。

・プロジェクトインキュベーション機構

インターンやキャリア形成において、コース生の対外活動を支援する機構。機構長は浅見徹教授。

・メンター

GCL 生活における疑問、悩みを相談できる先生。1 年次は各専攻に設けられており、2 年次には 1 人につき 2 人のメンターが付く。

・リーディング大学院

「産学官にわたりグローバルに活躍する優秀なリーダーの育成」のコンセプトの下、平成 23 年度文部科学省で始まった博士課程教育プロジェクト。全国に 62 のプログラムがあり、GCL も 24 年度に情報分野で採択された。

・リーディングフォーラム

毎年冬に行われる。全国の 1000 名以上のリーディング大学院生・教職員が集まるイベント。講演会やワークショップの他、学生向けのアイデアコンテストも開催される。

イベント告知

◆2014/04/15 新 GCL コース生

キックオフガイダンス

日時：4月15日(火) 18:30～(20:00 終了予定)

場所：未定

内容：2014年度より GCL コースへの履修を認められた方は、2014年度 GCL コース履修にあたり、必要な諸連絡を行いますので、必ずご参加ください。ガイダンス終了後には、コース生・教員との懇親会を予定しておりますので、こちらも合わせてよろしくお願いたします！

参加できない方は GCL 事務局へ連絡してください。

◆2014/04/18 メディアコンテンツ特別講義第1回 学部横断授業であるメディアコンテンツ特別講義 I が開講されます！

名だたる企業の要職を務める方々から、それぞれの知見に基づいた貴重な講演が聞けます。こういう授業も東大ならではの！第1回授業が4月18日に開催されるので、ぜひ参加・受講してください！

日時：4月18日(金)18:00～19:30(金曜6限)

場所：工学部2号館241教室

(工学部2号館)

http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_04_03_j.html

事前予約：不要

◆2014/04/22 GCL インターンシップ・ガイダンス

当該インターンシップの募集は7月下旬に始まり、10月上旬には採否が決定する予定です。VISA等の手続きに非常に長い時間がかかるため、昨年度より2ヶ月半ほど前倒し実施となっておりますので、奮っての参加・討論をお待ちしております。

教員向けイベントとなっておりますが、学生も参加できるので興味のある方はご参加ください。

日時：4月22日(火)19:00～20:00

場所：工学部2号館3階の電気系会議室1A&1B

(工学部2号館)

： <http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/>

編集・発行：

情報理工学系研究科・GCL 広報企画

(森友亮(情報理工D1)、荒川拓(学際情報学府M2)、金子和正(工B4)、柴山翔二郎(工B4)、須原宜史(工学系D2, 3月まで))

〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学工学部8号館621号室 GCL 事務局

E-mail: pr_plan@gcl.i.u-tokyo.ac.jp

cam01_04_03_j.html)

主催：東京大学ソーシャルICT グローバル・クリエイ

ティブリーダー育成プログラム

事前予約：不要

メディアコンテンツ学部型横断教育プログラム
メディアコンテンツ特別講義 I
金曜日 18:30-20:00
工2号館241講義室
工学部電子情報工学科/情報理工学系研究科
担当教員：相澤, 喜連川

2014年4月18日開講

4/18	「イノベーションのジレンマへの挑戦 -Windows開発におけるプロジェクトマネジメントの実際-」 マイクロソフトディベロップメント株式会社 陣内裕輔 (業務執行役員 オペレーティングシステム開発統括部 統括部長)
4/25	「ものづくりベンチャーの新潮流」 Mynd株式会社 鎌田富久 (代表取締役社長)
5/2	「(仮) Google Play」 Google Inc. Chris Yerga (Engineering Director)
5/9	「食卓造景学」 株式会社ライフスケープマーケティング 齋藤 隆 (代表取締役会長)
5/23	「世界最大のクリエイティブプラットフォームpixivのグロース戦略」 ピクシブ株式会社 伊藤浩樹 (グロース統括) 清水智雄 (開発シエネラルマネージャー)
6/13	「日本のインターネットサービスは世界でどのようなポジションを取れるか」 株式会社ディー・エヌ・エー 小林 賢治 (取締役)
6/20	「グローバルコミュニケーションアプリ「LINE」の成長と戦略」 LINE株式会社 森川 亮 (代表取締役社長)
6/27	「リクルートが展開するWebサービスの“裏側”」 株式会社リクルートテクノロジーズ 米谷修 (執行役員CTO)
7/4	「ニコニコのWEBサービスが及ぼす社会的影響の解説と考察」 株式会社ニワンゴ 杉本誠司 (代表取締役社長)
7/11	「広告事業におけるビッグデータ分析と数理モデルの構築」 株式会社サイバーエージェント 佐藤真一 (執行役員 最高技術責任者(CTO)) 吉田 岳彦 (エンジニア)
7/18	「Yahoo! JAPANにおけるビッグデータの活用とその舞台裏」 ヤフー株式会社 安宅 和人 (担当役員)

※講演者スケジュールは都合で変更になる場合があります。

東京大学 ソーシャルICTグローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム